

ACC021-01

会場:展示ホール7別室3

時間: 5月27日10:45-11:00

北アルプスにおける積雪化学調査

Snow chemistry at Northern Japan Alps

鈴木 啓助^{1*}, 池田 敦¹, 榎 拓登¹, 鈴木 大地¹, 兼子 祐人¹

Keisuke Suzuki^{1*}, Atsushi Ikeda¹, Takuto Maki¹, Daichi Suzuki¹, Yuto Kaneko¹

¹信州大学山岳科学総合研究所

¹IMS, Shinshu University

地球上の物質循環を考える際には、降水に含まれる化学物質の起源やその濃度変動の要因を明らかにすることが不可欠である。降水中の化学物質の起源は、大別すれば海塩起源、地殻起源、人為起源、生物活動起源などになる。わが国の中央に位置する中部山岳地域は、3000 m級の山々が聳え立ち、日本海側から太平洋側まで連なる山塊である。そのため、冬型の気圧配置の際には、北アルプス（飛騨山脈）で多くの降雪があり、南岸低気圧による降雪では南アルプス（赤石山脈）でもまとまった積雪が得られる。また、冬季の北西季節風に乗って黄砂が運ばれてきたり、中国大陸から人為起源物質がもたらされる。さらには、南岸低気圧によって、わが国の中部以西の都市域から人為起源物質が運ばれてくることになる。融雪が始まる前の山岳地域の積雪中には、これらの化学物質が保存されている。つまり、積雪を掘削し、積雪層を詳細に調査すれば、初冬から掘削時までの湿性および乾性沈着物が時系列的に復元できることになる。そこで、北アルプスにおいて積雪ピットでの化学調査を実施したので、その結果を報告する。